

時、福島第一原発の緊急時対策本部で吉田氏と一緒に作業した社員らがその壮絶な指揮ぶりを振り返った。●面参照

「腹切ろうと思っていま 不明との情報も流れた。した」。政府事故調の調査で吉田氏がそう漏らした場面は、事故発生三日後の二〇一一年三月十四日午前十一時一分、3号機原子炉建屋が爆発したときだった。現場には多くの作業員がおり、一時は約四十人が行方不明で、爆発しかねない。重苦しいムードが漂い、



東京電力福島第一原発の免震重要棟で、報道陣の取材を受ける吉田昌郎所長（当時）＝2011年11月12日（代表撮影）

「情報公開徹底を」 浜岡原発の地元反応

浜岡原発の地元反応

正式に公開部電力浜岡運転差し止を求めると、原表、鈴木卓馬さん（元）藤枝市を「吉田調査は原発事故の解明につながる貴重な記録で、公定外の事態があれば、原発は制

御できないことが浮き彫りになった。南海トラフ地震の震源域にある浜岡原発はさらに危険で、すぐに廃炉にすべきだ」と語気を強めた。「脱原発をめざす首長会議」した。世話人の湖西市の三上元市長は「想定外のこと」が次々と起こり、原発をコントロールするの難しさをあらためて感じた。現場の職員で死を覚悟した人もいただろう。こんなに危険な機械を再稼働させるのは信じられない」と政府の方針を批判した。中電と安全協定を結ぶ地元四市の一つで、浜岡原発の永久停止を求めている西原茂樹・牧之原市長は「浜岡原発のあり方や実効性のある原子力災害対策を考えると、福島原発事故の真相を明らかにすることが不可欠。今後必ずすべての情報が公開されるべきだ」と話した。御前崎市の石原茂雄市長は「政府が情報公開したことは歓迎したい」とコメント。浜岡原

た」と思い出す。「黙とう!」。話を終えたと、吉田氏は声を張り上げた。対策本部に響き渡るほどで、国頭さんの耳には今もその悲しい声が残っている。事故発生から約八カ月後、吉田氏は食道がんが見つかり、治療のため一二年十二月に所長を退いた。その直後、吉田氏は第一原発の対策本部を訪れて「絶対に戻ってくる」とあいさつしたが、闘病むなし一二年七月に死去した。第一原発に必ず戻ると誓った吉田氏の思いは何だったのか。「事故の責任をずっと背負い続けていこうとしていた」。国頭さんは吉田氏の胸中をそう察している。

社員や協力企業の作業員らは再び現場に向かった。第一復旧班長だった稲垣武之さん（五）は「人を殺してしまっかもしれないところにもまた人を出す。想像を絶する苦渋の選択だったと思います。吉田さんだからみんな行く、そんな感じがしました」と話す。地震発生後に4号機タービン建屋地下を調べていた若手の運転員二人は、津波に襲われて命を落としていた。余震などですぐに捜索できず、遺体が見つかったのは三月末だった。遺体が見つかった日、吉田氏は対策本部に集まる社員らに二人の死について話した。第二発電班長だった国頭晋さん（五）はそのときの様

吉田元所 第一、首都圏

「われわれのイメージは東日本壊滅」。政府の事故調査・検証委員会の聴取で、東京電力の吉田昌郎元所長は福島第一原発が危機的状况に陥った二〇一一年三月十四日のことをそう振

三月十四日夕から十五日朝にかけて、2号機では原子炉に水が入らず、格納容器圧力も上昇。このままだと燃料が溶け落ち、いずれ格納容器が破損、大量の放射性物質が外部に放出される事態が予想された。放射性物質の放出で2号機周辺の放射線量が急上昇すれば、1、3号機で続いていた消防車による原子炉



※()内は福島第1原発からの距離

発の再稼働については「防潮堤などの安全対策工事を終えた後に協議するべきこと」と明言を避けた。静岡県川勝平太知事は「現場と首相官邸の統一感のなさが浮き彫りになった生々しい記録だ。現場に権限を譲ることの重要性を痛感する」と感想を述べ、「浜岡原発と静岡県の意思疎通を密にする上で、証言の内容を反面教師にしたい」と話した。